

巖本嘉志子の思想形成

武田京子*

(1997年6月30日受理)

はじめに

巖本嘉志子(1864—1896)は、一般的には「若松賤子」の筆名で明治の女流文学者、特に『小公子』の翻訳者として著名である。しかし、自分自身では創作や翻訳などの文学を本業とする文学者ではなく、女性の社会的向上を目指す思想家または教育者であり、文学はその活動の有効な手段としてとらえていた。

巖本嘉志子は、以下のように小説の持っている教育的効果を強調している。

小説のミーンズとしての価値は、先手近な例を取れば、子供の弄ぶおもちゃに似て居ると思升、若しおもちゃ屋の代物に一切価値がないと致さば、世に有りふれた数々の小説本も誠に何の功能も御座り升まい、併しそうではない、おもちゃは子供の教育に大した関係のあるもの、作り様、用る様によっては、書物や教師の及ばない効用をすと仰れば、小説も矢張り矯風上、教育上に同様の関係を有って居って、間接には学校や論説や説教などのとどかめ處に其感化力が預って力があると思ひ升¹⁾。

本研究では、「女流文学者(児童文学者)」としての若松賤子ではなく、教育者・家庭人、いわば実生活者としての巖本嘉志子の思想形成の過程を明確にし、特色を探ろうとするものである。研究考察の主な資料として使用したものは『女学雑誌』、「The Japan Evangelist」に掲載された著作(エッセイ、小説、童話)、および伝記である。

巖本嘉志子の思想は、嘉志子自身の実体験(幼児体験)の中で形成されたものを土台に自己形成の過程の中での生活経験を取り入れ、伴侶としての善治の思想の影響を受けて形成されていったものであり、総合的にとらえ直す必要がある。また、その内容は、明治20年代に形成されつつあった中産階級の婦人だけでなく女子教育関係者に読まれ影響力を持っていたと考えられる。

嘉志子はその生涯の間、4回自分の名前を変えている。名前の変更は、嘉志子の環境や心境の変換の区切りの時期と一致する。名前の変更によって区切られる時期に従って、嘉志子の思想の形成の様子をたどり、その特色について考察した。

* 岩手大学教育学部

I これまでの巖本嘉志子に関する研究の流れ

嘉志子の夫・巖本善治やその活動の場であった明治女学校や『女学雑誌』の研究を行っている野辺地晴江氏によれば、巖本嘉志子・善治夫妻の目指した「女学」とは、「女性の地位を向上させ、その権利を伸張し、女性を幸福にするためのあらゆる学問」を意味し、『女学雑誌』の読者は男女を問わない「女性の地位向上を願うあらゆる人々」を対象としていた。『女学雑誌』の読者は、自身を啓発し自己の向上を図ろうと望む女性グループと女性の意識向上に理解と熱意を持つ進歩的な男性と、それに追従しうる少数の進歩的な女性が構成するグループに大別できる²⁾。巖本善治が最後まで離さなかった一般女性層の読者は母親や将来母親となっていく女性であり、その活動の中で発表された嘉志子の小説や子ども向けの読み物は、子どもを直接の読者として考えたのではなく、母親を仲立ちにして、子どもに間接的な教育的効果を与えるために書かれたものであった。

巖本嘉志子に関する従来の研究は、文学者または翻訳者としての若松賤子を対象として行われ、『女学雑誌』を主たる資料として作品の中に表された育児観（母子関係）に着目した研究が中心であった。

若松賤子と『女学雑誌』の関連について本田和子氏は、若松賤子の『女学雑誌』への登場時期に着目している。初期『女学雑誌』が男性優位の伝統遵守的な生き方の脱皮を目的に、女性の目を外へ向けさせようと意図し、家庭機能の重視と文学性の強化によって新たな転回を迎えた時期が一致していることと、また、若松賤子と善治の二人の結婚は「家庭」ということばに新たな意味を与えたことを示唆している。賤子の視点は「幼い者」に注がれるが、「子どもの権利を尊重する」というような硬質の論理ではなく、幼い者を目の前に置くとき、自覚を越えて自らに充満する「いとしさの想い」であるとしている。『女学雑誌』のなかに『児籃』というコラムが位置づけることが可能になると、嘉志子の想いは形になって表出された。それは、教育を受け、物を書く技術を身につけた女が「結婚し子どもを産み、それを育てつつ」自立を可能にする道であり、「家庭は、圧制と隷属の場ではなく、子どももまた、女を縛る柵ではない」と意味づけを行っている³⁾。善治の女学思想の核も家庭機能の重視であり、主婦の社会的有用性を積極的に評価していた。賤子は、善治の女学思想の実現者であり、書くことによってその思想を「形あるもの」にしようとしたのである。また、本田氏は、賤子の子どもに注がれるまなざしを「幼子を聖とする」キリスト教的なまなざしであると同時に日本の母のまなざし、つまり無条件で「わが子を是とする」受容的感受性であるとも指摘している⁴⁾。そして、その根底にあるのは、開化期日本人に共通してみられる新しく古い特性、日本人的感性によって感受し得た欧米的教養であるとする。また、賤子の作品の中に共通してみられる母と子のイメージの中には、見棄てられ愛を喪うみじめな子どもたちと、不信に満ちた家庭の像があることにふれ、『小公子』が賤子の陽の当たる一面とするなら、みじめな子どもたちは影の部分であるとし、その根底にあるのは抑圧された彼女の幼児体験であろうとしている。

沢山美果子氏は、「家父長的家族のもとでの良妻賢母像ではなく、欧米の近代家族における互いの人格の尊重を基礎とした性別分業論を根拠に、育児を女性の本務とすることによって生まれてきた母親像」を近代的母親像と名付けている⁵⁾。わが国において、近代的母親像の形成は1890年代に始まり、その形成に関わったコミュニケーション・メディアとして『女学雑誌』と

『婦人と子ども』を挙げている。『女学雑誌』については、主宰者巖本善治の家庭観を「家父長的な家族とは異なり、形態面では核家族、夫婦家族であったこと、また、子どもは労働力としてではなく養育と教育という投資に見合う利潤の対象としてみなし、また、子ども中心の『愛の巣』としての『家庭』像は『愛育』と母親の育児権限の強調につながっていく。」と把握している。善治の家庭観は嘉志子へ大きな影響を与えた。善治は「ホームと云へる文字」を日本語に訳すに「適当な文字なし」と述べ「家族」の文字をあてたが、のちに嘉志子は「家庭（ホーム）」と訳出した。従来の家父長的な家族としての「家」とは異なる、夫婦の愛情を中心に成立する子どもの教育に熱心な核家族としての近代家族がイメージされたと沢山は述べている。

内藤知美氏は『女学雑誌』の女学思想が内包する子どもの問題に注目し、女性観と子供観の歴史的な性格を明確にしている⁶⁾。

そのほか、嘉志子が採用した言文一致の文章体等に着眼した文学面の研究には、高橋政俊⁷⁾、和田繁二郎⁸⁾、長谷川政次⁹⁾、秋山勇造¹⁰⁾、鶴橋俊宏¹¹⁾、等のもが、また、嘉志子が外国人を读者対象として記事を書いた“The Japan Evangelist”についての研究には師岡愛子¹²⁾によるものがある。

若くして亡くなった巖本嘉志子は、自伝を書いていない。また、遺言によって伝記の作成を強く拒否していたが、後年にまとめられた伝記的な研究としては「とくと我を見たまえ」、「若松賤子不滅の生涯」など¹³⁾がある。

また、児童文学の分野においては、明治初期の児童文学史の研究の中でのキリスト教の果たした功績を評価する方向にあり、その中でも若松賤子の果たした役割が再評価されている¹⁴⁾。1994年頃より女性観に着目した研究¹⁵⁾やこれまで言及されることの少なかった“The Japan Evangelist”と若松賤子の関わりについての研究¹⁶⁾が学会等において発表されるようになってきている。尾崎るみ氏は、「欧米での女流作家の活躍や日本でも岸田俊子の演説などに刺激されて起こった、婦人の社会的・政治的活動、夫巖本善治の活動などに影響されて、文筆活動を通して社会に貢献したいという望みを持つようになったが、健康や社会情勢の変化によって進歩的であったはずの嘉志子の思想が現実の甘受を説くように変化した。」と述べている。久米依子氏は明治28年創刊された雑誌『少年世界』の少女欄に掲載された少女小説の研究¹⁷⁾の中で、「家」の中の勤めが重視され、保護者の監督下に日常生活の規範を従順に守るように諭す物語や論説が多く掲載される中で、若松賤子の『着物のなる木』『おもひで』は「教訓物語の枠組みの中で現実から解放される少女達の夢想世界を語ろうとし、厳しい規範のすきまをわずかに掻い潜る言説を模索していたように思われる」と評価している。しかし、いずれの研究も、児童文学者・翻訳者としての若松賤子を対象とした研究に止まっている。また、『若松賤子創作童話全集』¹⁸⁾が前述の尾崎るみ氏によって編集され、巖本嘉志子が児童向けに書いた創作童話は手軽に読むことができるようになった。

II 生き立ちと自己形成

1 自己形成の基盤・・・松川甲子(1864—1870)

1864(元治元)年3月1日、会津藩の隠密の長女として生まれ、干支にちなんで甲子となづけられた。職務の関係上、出生時に父親は不在であった。会津は、徳川家康の孫、保科正之を藩主とし、正之の定めた「大君之義一新大切に忠勤を存す可し」に始まる「家訓」が藩内の武

士のみならず女・子どもにもゆきわたり、幼いときから「ならぬものはならぬ」としつけられて育つ。友だち遊びをする年齢になると町内ごとに10人くらいずつ「什(ジュウ)」と呼ばれる遊び仲間が作られ、事前に誓いをたててから遊ぶ、という環境にあった。1868(慶応4)年の戊辰戦争の際に、当時数え4歳の嘉志子は母や祖母ともに戦火を逃れた。会津藩の家臣とその家族は勝つ見込みのない戦に、鐘の合図で籠城することになっていたが、敵の勢いが優り、嘉志子達は籠城できずやむを得ず逃げることになった。1894年、雑賀アサ(家老柳瀬三右衛門の娘・青山英和女学校校長)、山川双葉(家老山川尚江の娘、大山捨松の姉・普通学校の校長)、横山主税の母(幕末の名家老といわれた横山主税常德の妻)の懐古談“The Siege of Aizu Castle”の前書きに、嘉志子はそのときの印象について、当時三歳で身重の母と戦火を逃れた記憶があることきわめて簡単に述べている¹⁹⁾。幼くて記憶に残っていないのではなく、母は戦火を思い起こす半鐘を聞くと震えが止まらなくなったという祖母の言葉の後に、自分自身のことについてはまた別の機会にお話ししましょうと書き、時期が来るまでは話せない、この重大さを暗示させている。

同じ時、その後日本初の女子留学生になった山川捨松は、会津・鶴が城に姉弟とともに籠城していた。年齢差を考慮しなければならぬだろうが、籠城した側の山川捨松(7歳)の語る会津・鶴が城落城²⁰⁾は異なった印象である。武士としては城は命を賭けて守らなければならないものであり、負けることが分かっているにもかかわらず城とともに一族郎党が行動をとることに、ある種の目的意識も存在し、気分も高揚していたはずである。一方、嘉志子の方は「間に合わなかった。」という敗北感に満ちた、身重の母親と年老いた祖母との心細い、ただ生き延びるためだけの逃走であった。戦後も父の行方は知れず、母は産後の肥立ちが悪く健康を損ねたまま亡くなり、一家は離散する。生死の極限を目の当たりにし、生みの母はいわば妹と命の引き替えをしたように亡くなるという幼児体験は、嘉志子にとって非情な体験であった。父親は、戦後函館に渡り、藩のために働いているようであったが、函館の戦いに破れ捕虜となり、ただ存在はしているだけの嘉志子にとって明確な父親像を描きうる様なものではなかった。貧しさに加え、家族にも見放された嘉志子は徹底的な喪失感を味わうことになったのである。一方、捨松は会津藩の斗南藩移封に伴い、家族とともに津軽へと向かった。家老といえども貧しさは嘉志子と同様であった。父は捨松の出生以前に死亡していたが、長兄が父親代わりに一家の中心になり、次兄は東京で活動を始めていた。捨松は、一時的に口減らしのために函館に養女に送られ、「一家離散」の状況にあったが、家族の所在は明確であり、将来はまた集合できる見込みのある過渡期的状況であって、心の拠り所は家族の中にあつたということができよう。

内海健寿氏は、会津戦争の苦難と試練を体験した会津士族の中から多くの優れた宗教教育家が誕生したことに²¹⁾着目し、山路愛山の言葉を借りて、「精神的革命は多くは時代の陰影より出づ」と述べる。嘉志子の思想形成の源には、多くの生死を目の当たりにした会津戦争の生き残りの人たちに共通した影の部分に加え、父の所在不明と母の死によって家族にも見放されたという二重の影の部分を持つことになったのである。

2 フェリスの教育と自我の芽生え・・・大川かし(1870—1885)

1870(明治3)年、嘉志子は横浜在住の生糸交易商人の大川甚兵衛の養女となった。そのいきさつは、甚兵衛が会津にきて嘉志子に目を止めた、という偶然説が語り継がれてきたが、嘉志子の長男、荘民氏の「明治維新の一連の戦さで外国の文明を身を持って知った父勝次郎が(斗

南へ連れて行くよりも)長女に最新の教育を授けるために大川に託したと考えるのは誤りであろうか。」²²⁾とする説が、明治維新期に没落した多くの中流以下の武士が、子どもに新しい教育を受けさせるために多大な努力をしたことから推察しても有力であろう。経済的には富裕な大川家、教育的にはキダーさんの学校(後のフェリス女学院)という恵まれた環境が与えられるが、日常生活は心をなごませるような暖かい生育環境と云うことはできなかった。大川家は勤め先の山城屋の倒産の後江戸へ転居し、嘉志子と養母や血のつながらないきょうだいとの間に精神的な葛藤があり、養女として、家族になじめず心を開くことの出来なかった少女時代を送った。後に自分の本心をわかってもらえず一方的に叱責される当惑と口惜しさについて、しつけることの義務感が先行して子どもへの思いやりが不足したために、うまく信頼関係を結ぶことのできない様子を描き、不信に満ちた当時の生活が幼少時の嘉志子にとって心の大きな傷になり、癒やされるまでに多くの時間と努力が必要であったことがわかる²³⁾。

3年の空白の後、寄宿施設の整ったフェリス女学院へもどったが、その背景には実父と養父の間に嘉志子の教育や養育について話し合いがもたれたようである。ミッションスクールへの入学は、贅沢のように考えられるかもしれないが、万事西洋風の共立女学校に対してフェリスは質素な日本風で一般学生であっても5分の1の費用で済み、さらに全額無料の給費制度があった²⁴⁾。フェリス・セミナリーの寄宿舎の家庭的な雰囲気にも満ちた生活では、ミス・キダーを心の母とし、キリスト教の影響を強く受けながら自己形成を行っている。実母に養育されなかったという負い目は、生涯つきまとう。しかし、ミス・キダーは、寄宿生達を「私の大家族」と呼び、大家族の一員として加わった嘉志子は、ミス・キダーから生母とも養母とも異なるものを受け取っていく。後に30歳になった嘉志子は、少女時代を振り返り、自分自身が生母によって育てられなかった不幸は、その後には与えられた可能な限り最良の学校における教育によっても、満たすことはできなかった。情緒的に無頓着でありどこか心に冷たさがあるのは、そのためではないかと述べている²⁵⁾。

嘉志子はフェリスで生まれて初めて「平和」ということを実感すると同時に、休暇に帰る家族の住む家のない寂しさを経験する。寄宿生活は嘉志子に個人として生きるスタートの場であったと同時に今後の「家庭(ホーム)」を考え初める契機となった。キダーは結婚しミラー夫人となっていたが、嘉志子の精神面での母親ということが出来る。1881年には、「喜の音(ヨロコビノオトズレ)」という月刊誌とその幼児向けの付録の編集をしているミラー夫人のもとで夏休みを過ごし、雑誌の編集や集会の持ち方を見習い、このことは、後の嘉志子の活動に有効に活用された。7歳から18歳までフェリスに在学した嘉志子の受けた教育は、当時の日本では最も進んだものと言えるが、ミラー夫人はこのことについて、「日本で最高の教育を受けた女性でした。外国で勉強をした女性は何人もいますが、生まれながらの才質と上品さ、教育も教養もある外国人と同等に永く親交を結んだことは、高度の学校における多年の勉学とあいまって、誰にもひけをとらなかつたのです。完璧な英語力によって最高の文学を容易に理解し、著作や翻訳に発揮されたような見事な味わいをだすまでになったのです。」と評価した²⁶⁾。嘉志子が日本国内でミッションスクールに学んだ大きな利点は、日本語を忘れなかったことにある。留学生が英語を習得すると同時に日本語を忘れてしまい、日本語力の欠如がその後の活動のネックになっていたことを考えると、嘉志子はその才能を十二分に発揮できる可能性を持っていたと考えられる。1882(明治15)年フェリスを卒業したのち、母校の和文教師として経済的にも自立した。1887(明治20)年の学校要覧によれば、嘉志子は生理学、健全学、家事経済、

和文章、英文訳解を担当している。

Ⅲ 愛の自覚と結婚

1 自立した女性へ・・・島田嘉志子(1885—1889)

本名の甲子を嘉志子(嘉之子)と改字したことは志を嘉する、あるいは之を嘉するという自己肯定の現れと見ることができる。実父は会津の家を処分し、継母、みや、腹違いの弟一(はじめ)とともに上京した。これを契機に嘉志子は、本姓の松川ではなく隠密時代の仮の姓の島田を名乗り復籍する。しかし、一家の大黒柱であるべき父親は商売を始めるが軌道に乗らず、一家の経済的な拠り所はフェリスの女教師の嘉志子だけであった。1886(明治19)5月、『女学雑誌』へ「旧き都のつと」を投稿したのを契機に嘉志子は「若松賤子」のペンネームを使い始めた。山口怜子氏によれば、『賤』は嘉志子がこの世に抱いていた志であり、臨終の際に、『私は賤子、他に語るべきことはない』²⁷⁾と総括したという。

1887年、嘉志子23歳の時、恩師でもあり、心の母でもあるミラー夫人の肝いりの海軍士官世良田との縁談を自分の生き方とのずれを感じて断った。嘉志子は後に自叙伝的作品「すみれ」²⁸⁾という小説の中に明確ではないが当時の心境を主人公に投影している。

当時の嘉志子に世良田の他に将来を考えた人物の存在は考えられない。彼女にとって玉の輿ともいえる海軍士官との結婚は、彼女自身の文学や教育の分野で自立を図ろうとする生き方とは一致しなかったのかも知れない。世良田の求婚は、嘉志子にとっては「親切」であり、「栄誉」であっても、愛ではないという理由であった。

嘉志子は外面から見た家柄格式よりも、夫と妻が互いに尊敬しあい作り上げていく結婚を重要視し、夫婦間の伴侶性を特に重視していたのである。他の人は「玉の輿」を栄華のように誇るかもしれないが、嘉志子にとっては「氏無くして玉の輿に乗るということは、心を割く剣の如く感ぜられるもの」であり、「健康で夫と妻がくつろいで会話をする生涯を通じての友」であることを夫婦の理想としたのである²⁹⁾。

自分の意思に沿わない結婚を断った直後に咯血したが、回りのすすめもあってフェリスの職は続けた。嘉志子を精神的に支えたものは、中島夫妻・・・健康には恵まれないが結婚にも仕事にも自分の意志を通して活躍する中島俊子(湘煙)とそれを支える信行・・・の姿であり、さらに、『女学雑誌』を通して知り合った巖本善治との親交である。フェリスの試験委員でもある善治は嘉志子にとって当時は婦人問題の同志であり、朋友であった。この頃嘉志子は、“The Condition of Woman in Japan”(「日本における女性の地位」)というタイトルで女子教育の現状と自立の手段について論説を書いている³⁰⁾。これは、アメリカのバツサー女子大学が世界各国の女性の現況を把握するために、世界各地にいる同校の卒業生に問い合わせた際の報告文である。日本では、大山(山川)捨松に依頼がきたが、健康を害していたため依頼に応ずることが出来ず、横浜にいた同校の卒業生のギルパトリック夫人が書くことになった。そのための資料を女学雑誌社に問い合わせ、夫人の要請により、嘉志子が別稿として日本の女性の近況を書いてバツサー女子大学に送ったのである。日本の読者に向けて書かれたものではないが、嘉志子の英文は「女学雑誌」98号の付録として英文のまま掲載された。当時の婦人問題は、福沢諭吉を初め多くによって論じられてはいたが、女性の経済的な自立の手段まで言及するものは珍しかった。本文は「女子教育の現状」と「女性の自立の方法」の2点について書かれている。

前者については、明治維新後女子の高等教育の機会が与えられ、女性の教養と素養に準じて社会における活躍の場が與えられるようになってきたため、親は娘のために高等教育を求めるようになってきたこと、日本の新聞が「婦人問題」に目覚めたこと、近代外交政策の利点として婦人の地位向上が活用されるようになったこと、以上の3点を根拠として日本の女子教育が推進されていると述べている。また、後者については、これまでは、結婚が女性の唯一の生き方であり自立のための努力をしたことがないのは当たり前と考えられていたが、新しい時代を迎えてこのような状況が変革されるのは当然であると述べている。女性にふさわしい職業として教師を第一にあげ、女医の誕生や芸術家の出現も報告している。

しかし、嘉志子は自立のために結婚を否定するのではなく、家庭生活のなかで個人の自立を図ろうとするのである。「家に閉じこもらずペンを武器として働くこと。夫に隷属することなく自立して社会の向上と純化につくす。」と教え子や同僚に語っていたことを実生活の中で実践することになる。

1888(明治21)年、善治との婚約が成立してまもなく訪れた、父親勝次郎と自分に面差しの似た教え子ちえの死は、「少女時代の自分は死後の世界で父とともに幸せな時を過ごしている。」と感じさせ、父に存在と自分の幼少期に対する屈折した見方を修正するきっかけになった。

2 ホーム建設へ・・・巖本嘉志子(1889—1896)

結核による一時休職の後、退職も考えたが周囲のすすめもあって、教員生活は続けていた。嘉志子に新たに家庭建設という生きる目標を与えたのが、巖本善治(1868—1942)である。彼は、教育に関する近代化が早い時期に始まった、旧幕府側の兵庫県の出石の商人、井上藤兵衛の次男として生まれた。叔父にあたる詩人巖本琴城の養子となった幼少時の家庭環境は、嘉志子のそれと似通っていた。1876(明治9)年に上京し、中村正直(敬字)の小石川同人社に学び、1880(明治13)年、津田仙の学農社に入り、1883(明治16)年、下谷教会で木村熊二から受洗している。学農社を卒業した後、『農業雑誌』の編輯長となり、1885(明治18)年『基督教新聞』の主筆となった。この経歴からもわかるように、善治には生来のジャーナリストとしての才能があった。木村熊二との関係から、明治女学校創立に協力し1887(明治20)年には教頭になっている。

「自分は気鬱家なので、結婚相手は明朗快活なのが良い」という「合性論」を楯に結婚に消極的な善治に対して、嘉志子の方が積極的になって婚姻は成立した。しかし、この婚姻に対して善治も周囲も「良き花嫁を得られた」と受け取っていることが、嘉志子にとっては不本意であった。嘉志子にとって、自分の結婚は従来の「家」の介入はなく、因習を排し、伴侶性を重視した新しいものであるはずであった。嘉志子は、結婚に対する喜びと不安、怒りと愛情の激しく渦巻く心中を“The Bridal Veil”³¹⁾と題する一編の詩に表している。当時の女性達のほとんどが、結婚は「家」のためにするものであって、自分自身の意思などは別の次元で考えていたのであったが、嘉志子の考える結婚は根本的に異なるものであった。このことを嘉志子は、「自己を保留して夫には隷属しない」という言葉で宣言した。

善治は自分自身が結婚する前から、夫婦とその子から成立する近代的な家族の存在を強く主張していた³²⁾。家族は天の名によって親子夫婦兄弟姉妹となった者が本来の愛情に日常の歓楽憂苦を共に同じ運命を共有するために一体となることによって成立する、と述べ、家族による

和楽団樂の重要性を強調する。従来の家長に統率された大家族の中では、夫婦間にお互いを尊敬する気持ちなどは生まれるはずもなく、真正のホーム真正の和楽団樂が成立するのは難しい、と主張している。家族の中に和楽団樂を実現するためには、「家内の者良く互いに忍ぶところあるを要す。」と個人の気構えを変えると同時に、従来家族の仕組みを変更する必要がある、子世代が結婚すると同時に別居することが親子の永久の親愛の絆を固くする秘訣だ、と述べる。また、女性の職業については、女性が男性に隷属せざるを得ない原因に、女性の経済力の欠如を述べ、女性が職業を持つことと相続権を與える必要性を主張した。これまでは「婦人は外で見られる者ではない」という理由のもとに、特に既婚婦人の職業は限られてしまっている。アメリカでは300種ほどで、増加の傾向があるから（日本の）前途に希望を見いだしている³³⁾。しかし、男性と同額の賃金を要求したり、従来男性固有の職業とされていた官吏、公務員の職を要求することはよしとはしていない。ホームを婦人の管轄とし、家の中に婦人をとじ込めるのではなく、ホームを拠点とし夫を助け児を教育する傍らで両立する職業、つまり、紫式部、赤染右衛門、シャーロット・ブロンテ、ジェーン・オウスチンなどを例に挙げて「文筆の業」を勧めている³⁴⁾。三井須美子氏が「巖本善治の近代家族観の中心概念は家長権の支配する一夫一婦制であり、その内実には妻の無能力制度のうえになりつつ良妻賢母である。」³⁵⁾と述べるように、善治にとって、健康上の理由のために教師としての自立と主婦業の両立の果たせない嘉志子との結婚は、まさに「理想の花嫁」良き嫁を得たことになるのであった。女教師として経済的に自立し、家族を養っていた実績のある嘉志子との間には当然食い違いが生じ、それが、形をなして表出されたのが“The Bridal Veil”であったのだろう。

IV 家庭人としての体験と思想の展開

1 主婦としての自覚（主婦と仕事の両立について）

嘉志子は結婚と同時にフェリスの教育の現場から退職した。新居は東京の麴町となり、体力的に主婦と教師の両立は難しく、活躍の場を「女学雑誌」へと移した。しかし、家庭の中に蟄居するのではなく、家庭を拠点としてペンを執って自己の実現を図ろうとしたのである。「野菊」³⁶⁾「お向ふの離れ」³⁷⁾「すみれ」を著し、「イナック・アーデン物語」³⁸⁾を翻訳し、「忘れ形見」³⁹⁾を創作翻案した。嘉志子は自分の考えを的確に表現する方法として、一時廃れていた言文一致体を用いるようになるが、文語体でもなく英文でもなく、嘉志子の内なる声を忠実に表現する方法として有効であった。

「新しい言語を習得する者は、新しい文化の神髄を極める」と云われるが、これは巖本夫人に関しては見事に核心をついた言葉である。日本人としての日本人らしさというか、本性を少しも失わなかった。日本女性としての本質は、個人的につきあったり、また書物を通して知った外国女性の徳性について得た知識のおかげで、大きく豊かになり広がったのである⁴⁰⁾。

これは、嘉志子の英語力をたたえた文であるが、自己を忠実に文章に表現しようとすると言語体よりも英文の方が嘉志子にとっては容易であった。さらに、言文一致体を使うことによって、嘉志子は、『女学雑誌』の読者の対して有効な表現方法を見つけたのだった。言文一致体は加藤弘之、植木枝盛等が自由民権運動関係の著述に言文一致の使用を試みており、明治19年頃

から二葉亭四迷、山田美妙等の新進作家によって「だ」調、「です」調の小説が書かれるようになっていたが、着手されたばかりで、それぞれが模索状態であった。嘉志子は、「言葉遣いも話の内容も賤子がフェリスの同僚や教え子と話す口調をそのままうつしとろうとしている。」⁴¹⁾のである。本田和子氏は、嘉志子の表現形態について、従来、『『言文一致』草創期に於いて純粋の交互を駆使して優れた文体をつくり出した。』（鈴木二三雄）、「文学史や文章史の重要な部分をかたちづくっている」（橋浦兵一）等の評価を認めた上で、嘉志子は作家であるよりも「語り伝える人」であり、嘉志子自身の心に満ちてくる「思い」を表現する方法として同僚や教え子と話す口調そのままに「語り」を文字化した言文一致体を用いた。それは会津の人たちの魂の口承に通ずるものであった、という⁴²⁾。

自己表出の方法としては嘉志子は方策を見いだしていったが、家庭生活の面ではどうであったのか。嘉志子は、「国民の友」にディケンズの『デビッド・カッパフィールド』の第44章を翻訳して「雛嫁」⁴³⁾という題を付けて発表している。相馬黒光は嘉志子は主人公に、新婚当時の自分を振り返り重ね合わせているという。主人公ドラは、常識外れのチャイルド・ウィフで、そのすることなすことが夫には当惑するものであった。家政には一切不向きで、室内は散らかって、不体裁、不調法、不手際が続く。夫が道理を言って聞かせようとすれば、「理屈を言われにお嫁にきたのではない」と泣き出してしまうのである。

「大膽な女子新教育の理想を、勇敢に実行に進めて華々しく立っていた當年の新夫も、最高の教育を受けて巧みな譯筆をふるふ新婦も、若さは若し、やっぱりこんなことだつたらうなあと深く微笑させられるのであります。（中略）いろいろ女史を知る人の話を集めて考へてみると、如何にも女史の半面にはかういふ可憐なわがままがあつたらうと想像され、実生活のやりにくさからフェリス女学校といふ故郷が時々なつかしくなり、すると並々ならぬ愛情のなかですから、氣のまはるやうなこともあつたりして、つい深刻な場面も演ぜられたであらうと失禮な想像を加へるのですが、いよいよそこに女史への親愛の情を増す心地がします。」⁴⁴⁾

黒光は、嘉志子のチャイルド・ウィフを微笑ましく受け取っている。しかし、後の『女学雑誌』掲載の実用記事の内容⁴⁵⁾や、フェリスにおいて家事経済を教えていた事実から考えて、家事能力が欠如していたのではなく、意識の面で家事よりも文筆活動を優先させたことをチャイルド・ウィフという形で表現したと考えると良いだろう。まず、家事を滞りなく行ってから、自分のやりたいことをするのではない点を嘉志子は「雛嫁」的だと言うのだと考えられる。

また、自己形成期の嘉志子にとって、唯一の「家庭」ともいえるフェリスにおける教育から受け取ったものをそのまま実生活の中で押し進めようとした自分の姿に、ドラの同じ姿を見出し出していたのかもしれない。さらに、嘉志子は結婚5年後、女学生の時に描いていた理想の主婦像を実現するに臨んで、「主婦は家庭の女主人であって、家族のためにいろいろと工夫をすることは有意義なことである」⁴⁶⁾と考える。しかし、女主人の独善で、考えを押し進めようとするといろいろと不都合が生じてくる。たとえ夫との合意の上であっても、場合によっては配慮が必要になり、特に親族との交際の中で不都合が生じてくることを強調する。理想を実現するためには多少の妥協も必要になってくること、西洋風の暮らし方をそのまま日本の生活に移入しようとしても本質的な良さを生かし切れないことを感じていた。

2 子どもの誕生によって呼び起こされたもの

嘉志子にとっての理想の家庭は、子どもが誕生することによって完成する。「肺結核の婦人のもらうことは子孫のためにいかぬ」と善治と親交の深い医師高田耕安に反対されたが、1890年長女清子が誕生し、「我等ただ二人なりしホームに先頃客人の来まして、始めてまことの家族を作しつるなり。」⁴⁷⁾ 記すように、長男次女と続く子どもの誕生は嘉志子に理想の家庭が着実に建設されていくことを実感させた。子どもを育てることは「家庭（ホーム）」の建設であり、自分自身の家庭が母胎となり、そこでペンを執って作品を生み出していくことが、やがて社会の浄化につながると考えていた。それは、第1子を身ごもると同時に、翻訳を始めた『小公子』の中から読みとることができる。

心なき人こそ、幼子を目し、生ひ立ちて人となるまでは真に数の足らぬ無益の邪魔物の様に申し升うが、幼子は世に生まれたる其日より、否、其前父母がいついつにはと、待設ける時分から、はやおのづから天職を備へて居り升て、決して不完全な端物では御座りません。されば私どもが濁世の蓮花、家庭の天使とも推すべき彼の幼子の天職は、いとも軽からぬことで御座り升。然るに世の風浪はこれを屈曲らせ、心なき同胞はあたら若木を踏みにぢりて、終に花は汚れ、天使は墮落するに至る景況を嘆ぬ人はあり升まい。邪道に陥らふとする父の足をとぐめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の徳を思ひ起こさせるのは、神聖なるミッションを擔ふたる可愛の幼子に限るので、是に代って其任を果たす者は他に何も有りません。(中略)

ホームの教導者を先ず教へ導き、其清素爛漫の容姿を發揮させ、其のミッションを全ふさせるのは、亦尙親始め其同胞の務めです。即ち世の中の関係は、総て相支へ相扶くる道理に基くので、例へば、私どもが生存ふて雨風を凌ぐ家は、矢張り私どもの手に成らねばならず、浅瀬を教ふる子供は、是非負ふて行かねばならぬと同じ道理で御座りませう。

私は深く幼子を愛し、其恩を思う者で、殊に共々に珍重す可き此客人を尙一層優待いたしたく切に希望いたします⁴⁸⁾。

天真爛漫で汚れを知らない純情清潔な主人公セドリックが、アメリカ嫌いで頑固な、「侯爵」という権威を笠に着たドリコンコート老侯爵の気持ちを軟化させるのである。また、その背景にはセドリックと母親エロル夫人とのこまやかな愛情が存在している。現代の児童文学界では「感傷的」とであると、一般的には評判は良くないが、ジョン・ロウ・タウンゼントのように再認識する批評家もいる。彼によれば『小公子』のメッセージは「本当の貴族性は人物そのもののなかにある」⁴⁹⁾ ということである。つまりアメリカ生まれのエロル夫人は、財産も身よりもなく自分自身で生計を立て行かなければならないような、侯爵から見れば卑しい一庶民に過ぎないが、その心の中には真の貴族ともいえる精神が存在しており、セドリックという純真無垢な子どもの心を通して、ドリコンコート老侯爵の気持ちを変えることが出来たのである。

嘉志子が『小公子』の連載を始めた明治23年は、わが国最初の近代民主主義革命運動である自由民権運動が、大日本帝国憲法の発布の後、大同団結運動という形を取って終局を迎えていた。女子教育や婦人に関する問題も、西洋の諸外国と肩を並べる国家として急速に形を整えて行こうとする世の中では、文明開化期とは比べようのないほど下火になってしまっていた。しかし、女子を啓蒙する目的で発刊された『女学雑誌』に連載された『小公子』は、読者である母親から大歓迎されたのである。

相馬黒光は、児童のための読み物が珍しかった時代に、「大人の中に少しばかり籍をわけてもらつてゐた古い日本の子供の境地に、全く清新な理想の世界を加へ、幼き魂の目ざめに正しく力ある贈り物をしたのは、女史を以て第一人とします。家庭という言葉さへ耳新しかったこの時代に、女史の功績は實に大きいのであります。」⁵⁰⁾と児童文学的見地からの評価をしている。また、片山哲は母親の思い出として、「母は其の『小公子』をとじ綴り、人々にもよませ、小学校上級生になった私たちを集めて読んできかせ、中学にはいってからは、子供達に自分でそれを読ませるようにした。」⁵¹⁾と語っている(片山哲「母の愛読する“小公子”物語」。平塚らいてうも女学校3、4年の頃『小公子』を読んでいた。「話の筋よりも、訳者若松賤子の口絵写真に印象づけられ憧れにもにた気持ちを持った」⁵²⁾ことを自伝の中で回想している。女学雑誌の読者から始まって、『小公子』は雑誌連載当初から評判になり、その後、単行本となって刊行され、明治から大正にかけて「家庭小説」として大流行した。嘉志子の死後、前後編をまとめて博文館から出版された『小公子』は昭和5年までに42版を重ね、昭和2年に岩波文庫版が、昭和4年に改造社版が出版された。岩波文庫版は、リクエスト復刊された第30刷本として、現在も入手可能である。

『リトル・ロード・フォントロイ』を譯して、これに「小公子」と題を決めるまでには、適当な文字が得られなくて苦心しました。「小公達」など、考へて見たがどうも気に入らない。すると巖本先生が「小公子」はどうかといはれて、初めてそれに決定したのだそうで、女史は非常によろこび、その後も「漢文は完結で要を得て便利ですね」と言つてゐました⁵³⁾。

嘉志子以降、60人以上が翻訳を行っているが『小公子』以外の題名は使われていない。題名は巖本夫婦の合作であること、言い換えるならば夫妻の女学思想を母胎として誕生した子どもということが出来るのである。

『小公子』『小公女』⁵⁴⁾の翻訳と並行して『女学雑誌』の家政欄に「子供につきて」⁵⁵⁾を連載し、「小言のいひ様」⁵⁶⁾等の子育ての具体例を示していった。彼女自身もこの間に長男莊民を明治24年12月に、次女民子を明治27年8月に生んでいる。

3 理想と現実の狭間で

嘉志子の「子ども」に対する見方は、従来一般的であった見方とは異なり、「子どもの権利の保護」「家庭教育の重視」である。また、自分自身の子ども時代を振り返り、たとえ不毛な子ども時代を送ったとしても、それ以降の対応の仕方によって、子どもの傷は癒されるということ『女学雑誌』に4回にわたって連載された「子供につきて」のなかで強調した。

嘉志子は自分自身の家庭(ホーム)建設に着手することによって、それまでの女子の自立のための女子教育重視から家庭教育重視へと方向を転回することになる。誰よりも増して母の手によって育てられる子どもが幸福である事を強調し、その躰方も、行儀作法などは大目に見て、従来の厳格な鑄型に無理矢理に押し込めるようなものではなく、子どもの自由な意思を尊重することを良しとした。

死を意識した家庭建設の過程では、3人の子どもの誕生は喜ばしいものの、将来への不安は大きくなり、更に、多くのミッションスクールとは違って、学校経営のための資金を外国の伝道費に頼らない明治女学校と女学雑誌社の経営は困難を究めたことが、嘉志子の不安を高め

た。

「明治女学校はあくまでも外国の寄付は仰がぬ、そのかわり所謂教会や宣教師の制肘をも受けないで、日本基督教主義でやっていこうと致しましたから、困難も多かったわけです。」⁵⁷⁾と善治が回想するように、内村鑑三が一高を追われたときの月給が65円であり、官報局官吏になった二葉亭四迷の月給が35円であったときに、女学雑誌社の編集代行であった川合山月の月給が5円で、島崎藤村の翻訳の報酬が月7円（あるいは9円）であったことから経済的な困難さは分かるであろう。女学雑誌社の最盛期に於いても経営は苦しく、打開策を求めて善治は日本中を動き回り、嘉志子は仕事の流れを停滞させないために来訪者の話を聞き、都合を見合わせ連絡を取るなどの内助の功的な役割を果たしていた。

さらに、教育勅語の発布以後、明治政府の思想政策に押されてキリスト教を巡る社会情勢は悪化の一步をたどっていた。善治は『女学雑誌』と『評論』の論説を執筆することで閉塞状況を打開しようとするが効果はなく、「大日本基督国」の設立を夢見、その手始めとして海外伝道（朝鮮）を計画し、身辺整理に取りかかった。嘉志子は留守中の生活費を確保するために仙台の東北学院で働くつもりであったが、健康上の理由から実現は不可能であった。その代わりに、東北学院の宣教師であったW・E・ホーイによって創刊された、“The Japan Evangelist”の婦人欄と子ども欄の編集と執筆を担当するようになり、嘉志子の執筆活動の中心は『女学雑誌』から“The Japan Evangelist”へと移行していった。執筆内容は日本歴史、文学、習俗、国民性、女子教育、キリスト教精神に支えられた福祉活動、宗教、戦争、女性の社会的地位など広い範囲にわたり、英語で国内外の外国人を対象に日本を紹介した。『女学雑誌』では自分自身の心の中にあふれ出るものを執筆または翻訳という形で表現していたが、“The Japan Evangelist”では逆に、日本のことを客観的にとらえることになった。

身体的ばかりでなく、善治の置かれた社会的閉塞状況といらだちに対する気遣いから、嘉志子の精神は極限状況にあった。当時、明治女学校の生徒だった相馬黒光は、憔悴しきった嘉志子の姿をしばしば見かけたことがあった。「このまま放置しておけば自滅を招いて、つまりは緩慢な自殺行為だ。」という医師のアドバイスを受け入れ、自分自身の問題を客観的にとらえ直すゆとりを残していた。子どもの世話は一人暮らしの妹に頼んで、しばらくの休養が必要であること、長期間が不可能ならば半日でも一人になる時間を確保することが如何に主婦の精神疲労の回復に有効であるかを述べている⁵⁸⁾。

衰弱した嘉志子は4人目の子どもを身ごもったことを知り、「私の命はお産まで」と覚悟をする。自分の命と引き替えに子どもを生むのではなく、胎児の生命によって自分が生かされていると感じていたのである。嘉志子が自分の死後子ども達を託していくのは、会津で逃げまどいのさなかに生まれた妹みやである。生母と幼い時に死別した嘉志子は養母の元で育てられ、決して幸せな少女時代を送ったとは考えていなかったが、ミス・キダー（ミラー夫人）との出会いによって自己を肯定することができ、家庭建設の理想を実現させることができたのである。死を予期しながら文筆と家政は嘉志子の人生の基盤であり、「家庭（ホーム）」を素材にした作品を残している⁵⁹⁾。

嘉志子の死後、みやは姉の胸中をしっかりと受け止め、3人の子どもの母親代わりとなり成人まで育て上げ、その後も巖本家の敷地内に1944（昭和19）年76歳で亡くなるまで住んでいた。みやは義兄の後添いになったわけでもなく、義兄が再婚した後も生涯結婚せず、従って自分の子どもを持つこともなく、姉に代わって母親役割をとることに終始した。みや自身はこのこと

についてなにも述べてはいないが、会津戦争のさなか、母が自分の命と引き替えに産み出してくれた生命を姉に代わって子ども達の成長に結びつけていくことで、みや自身の積極的な自己実現の道ととらえていたと考えられる。

1896（明治29）年、日本のプロテスタント・キリスト教にとって、暗い谷間の時代のまっただ中で、外国からの経済的援助を受けず、教会や宣教師とも無関係で民族主義的なキリスト教主義を誇りに思っている善治と嘉志子の精神的なよりどころであった明治女学校は焼失した。肉体的にも精神的にも力つきた嘉志子は、火災の2日後、胎内の子どもと共に心臓麻痺のため亡くなった。まさに、4人目の子どもの生命とともに自分自身の死を受け止め、生命を完結させていったのである。

おわりに

巖本嘉志子の生涯を著作や伝記によって追体験し、嘉志子の思想形成過程を把握した。巖本嘉志子の思想の特色としては以下のことが明らかになった

嘉志子の思想は、会津戦争にまつわる幼児体験を源としている。家庭、特に両親の喪失感が「曲ねれ者」と嘉志子に言わせる、屈折した前半期の自己形成につながった。自分自身の家庭建設に着手し、着々と実現していく見通しがついてくるに従って、自己や両親を受容することができるようになるが、それまで幼児体験は思想形成のマイナス要素となった。また、会津戦争の生き残りとしての記憶は、無名の会津人達の「会津魂」を伝える使命感へとつながり、ペンネームにも反映されている。

自己形成期のフェリス・セミナリーにおける寄宿生活は、文明開化期の日本において先進的な教育をいち早く受容することと同時に、嘉志子にとって生まれて始めて経験する暖かい家庭的な生活であった。「曲ねれ者」もその後の愛情に満ちた対応によって、生まれ変わりうることを確信させ、自己を受容する後半期の自己形成に影響を与えた。教育面で言えば、卓越した英語力を身につけたが、日本語教育や日本的な生活様式をおろそかにしない教育的配慮のために、日本語力はさらに磨きが掛けられ、その後の執筆活動に支障を来すことはなかった。

フェリス・セミナリーはオランダ改革派の宣教師によって開設された学校である。アメリカに於いても婦人宣教師の多くは「つつましく信仰の深い、地方の中流の家庭に育ち、当時の女性としては人並み以上の教育を受け、教師として自活しながら、より広い地平に活躍の場を求める、上昇志向の強い女性たちであった。」⁶⁰が嘉志子が人生のモデルとしたミス・キダーもその一人であった。嘉志子はキダー個人からばかりでなく、キリスト教そのものからも多くの影響を受けた。特に個を尊重する態度は、当時の日本人女性としては萌芽的なものといえるだろう。

しかし、嘉志子は、自立した女性としての自覚は持ったものの、実際の行動を起こすまでには至らなかった。同時代の先進的な教育を受けた女性達の多くがその教育を社会的に十分に生かし切れなかったのと同様である。文明開化の一時期には、女性の存在が重要性が認識され、女子教育の重要性が叫ばれたが、西欧諸国と肩を並べて行くためには、日清・日露戦争によるナショナリズムの高揚に伴い女性の生き方の指標も「良妻賢母主義」とらざるを得なくなった。結婚している場合には、家庭の中で夫を支えることを優先した上での自己表出に止まり、「社会を改革しよう」という行動にはつながらなかった。

もしも、嘉志子が健康に恵まれより永い生命を維持できたなら、どのような著作を残したであろうか。善治の明治女学校ばかりでなくキリスト教を基盤に置いた教育が弾圧されていく状況の中で、嘉志子が生きる目的とした、家庭（ホーム）を基盤にして社会を浄化させる視点からの著作は果たして続けることができたのであろうか。たとえ、著作に新しい視点を見いだすことができたとしても、社会的には凋落していく善治を差し置いて、児童文学者若松賤子として社会的な地位を築くことができたかどうかは疑問である。『女学雑誌』の編集者で、「こわれ指輪」の著者である清水紫琴（古在豊子）が、結婚後社会的な活動をすっかりやめてしまった例などを考えても、嘉志子が夫善治と自分とは全く別の存在であると主張し、著作に専念したかどうかは疑問である。

自分自身が女性であることを自覚し、夫や家族から自分を切り離し社会における一個人として自分自身をとらえた上で、社会と女性、子どもと母親の問題を論ずる女性の出現は、与謝野晶子や平塚らいてうなどの「新しい女性」達が出現するまで待たなければならなかった。それには社会自体がまだ期を熟していなかったのである。

引用文献及び註

- 1) 若松しづ「閨秀小説家答」（『女学雑誌』207号雑録明治23年）pp.13-16.
- 2) 野辺地晴江「『女学雑誌』概観」（青山なを他『女学雑誌諸索引』慶応通信、1960）pp.193.
- 3) 本田和子「『女学雑誌』における『児籃』（『お茶の水女子大学女性文化紀要』2号 1981）
- 4) 本田和子「若松賤子解説」（『日本児童文学大系2』ほるぷ出版、昭和52年）
- 5) 沢山美果子「近代的母親像形成についての一考察—1890-1900年代における育児論の展開—」（『歴史評論』323号 1977）
- 6) 内藤知美「『女学雑誌』にあらわれる子供—母子関係の展開を中心として—」（『児童文学研究』25 1993）
- 7) 高橋政俊「『小公子』の評価—『賤子』の理想と文章表現を中心に—」（『日本文学研究』9号 昭和44年）
- 8) 和田繁二郎「若松賤子と樋口一葉—『すみれ』と『経づくゑ』と」（『日本文芸学』人文・社会編 42巻4号）
- 9) 長谷川政次「若松賤子『忘れ形見』の文体—清水紫琴『こわれ指輪』との比較—」（『國學院雑誌』人文・社会編39巻7号）
- 10) 秋山勇造「明治期の翻訳者3 若松賤子」（『人文研究』123号）
- 11) 鶴橋俊宏「若松賤子の翻訳小説におけるマセンカット・マセンデシタ」（静岡県立大学短期大学部研究紀要8）
- 12) 師岡愛子「巖本嘉志子とThe Japan Evangelist」（『日本女子大学紀要文学部』32号）
- 13) 若松賤子の伝記としては、山口怜子『とくと我を見たまえ—若松賤子の生涯』（新潮社、1980）、若松賤子刊行委員会編『若松賤子不滅の生涯』（共栄社出版、1977）、相馬黒光『明治の三女性』（復刻版）（不二出版、1988）、同『黙移』（『日本人の自伝』6 平凡社、1980）がある。小説ではあるが、当時の明治女学校の生活を知る手だてとして、『森』（野上弥生子 新潮社、1985）がある。
- 14) 日本児童文学学会 富田博之・上笙一郎編『日本のキリスト教児童文学』（国土社、1995）
- 15) 尾崎るみ「若松賤子—その女性観と児童文学をめぐって—」（児童文学学会1994年12月10日東京例会）

- 16) 尾崎るみ「若松賤子と『ジャパン・エヴァンジェリスト』の子ども欄（日本児童文学学会第34回研究大会）
- 17) 久米依子「『少年世界』の中の少女たち」（日本児童文学学会1995年4月8日東京例会）
- 18) 尾崎るみ編『若松賤子創作童話集』（日本児童文化史叢書4, 久山社1995）19) “The Siege of Aizu Castle” Edited by Mrs. KashiIwamoto” The Japan Evangelist” Woman’s Department II-1 pp.36-37 (1894.10), II-2pp.103-106 (1894.12) 三人の懐古談は、「会津の婦女子」という表題で、『女学雑誌』389, 390号（明治27年）の「史伝」に掲載されたが、嘉志子の印象が書かれている前書きの部分は掲載されなかった。
- 20) 久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初の女子留学生』（中央公論社, 1988）pp27-28.
- 21) 内海健寿『会津のキリスト教—明治期の先覚者列伝—』（キリスト新聞社, 1989）
- 22) 山口怜子『とくと我を見たまえ—若松賤子の生涯』（新潮社, 1980）
- 23) 「子供に付て2」（『女学雑誌』346号 家政 明治26年）。そのほか「ひろひ児上・中・完結」（『女学雑誌』338-340号 児籃明治26年）, 「砂糖のかくしどこ」（『女学雑誌』366号明治27年）, 「邪推深き後家1.2」（『女学雑誌』375.378号明治27年）の中に大人と信頼関係を結べない子供の姿が描かれている。
- 24) 村上信彦『明治女性史 上巻 文明開化』（理論社, 1969）
- 25) 賤の女「ホーム教育なし（主婦となりし女学生の述懐2）」（『女学雑誌』376号明治27年）
- 26) フェリス女学校第一回卒業生『巖本嘉志子婦人の想いで（付巖本嘉志子英文著作集）』（「巖本嘉志子嘉志子」（別冊日本語訳）師岡愛子 龍溪舎, 1982）pp.1 79-181.
- 27) 前掲22) pp.10.
- 28) 若松しづ「すみれ」は『女学雑誌』183-187号（明治22年）に4回にわたって掲載された。
- 29) 賤の女「玉の輿」（『女学雑誌』195号 明治23年）
- 30) 島田かし子『日本における女性の地位』（「巖本嘉志子嘉志子」（別冊日本語訳）師岡愛子 龍溪舎, 1982）pp.151-166. “The Condition of Woman in Japan”（『女学雑誌』98号付録明治21年）
- 31) “The Bridal Vail”（『女学雑誌』172号明治22年）
- 32) 巖本善治は『女学雑誌』96-102号の社説に日本の家族について論説を書いている。
- 33) 巖本善治「女子職業の論」（『女学雑誌』60号社説明治20年）
- 34) 巖本善治「女子と文筆の業」（『女学雑誌』79号社説明治20年）
- 35) 三井須美子「巖本善治の近代家族観」（『都留文科大学紀要』29号1988）
- 36) しづ「野菊」（『女学雑誌』182号 明治22年）
- 37) 若松しづ「お向ふの離れ」（同上）
- 38) 某女訳「イナック・アーデン物語」（『女学雑誌』189-202号 明治22-23年）
- 39) 若松しづ子「忘れ形見」（『女学雑誌』194号付録 明治23年）
- 40) 前掲30) pp.9-10.
- 41) 前掲22) pp.133.
- 42) 前掲4) pp.436-438.
- 43) 「雛嫁」（『国民の友』163号 明治25年）
- 44) 相馬黒光「明治の三女性（復刻版）」（不二出版, 1988）pp.238.
- 45) しづ子「家内重宝録」（『女学雑誌』353号）, 「熱湯のききめ」（『女学雑誌』386号）
- 46) 賤の女「女学生より主婦となりたる人の述懐」（『女学雑誌』373号 明治27年）
- 47) 母「我が子, 人の子」（『女学雑誌』273号明治24年）

- 48) 若松しづ子『『小公子』の序』(『女学雑誌』288号 明治24年)
- 49) J.R タウンゼント『子どもの本の歴史 英語圏の児童文学(上)』(岩波書店, 1982) pp.122-123.
- 50) 前掲13) pp.255.
- 51) 片山哲「母の愛読する“小公子”物語」(『回顧と展望』昭和42年, 前掲22) pp.172.より転載)
- 52) 平塚らいてう『平塚らいてう自伝 元始, 女性は太陽であった①』(大月書店, 1992) pp.142.
- 53) 前掲13) pp.233.
- 54) 原題は「セイラ・クルーの話」『少年園』明治26年9月より27年4月まで掲載された。
- 55) 「子供に付て」は『女学雑誌』344-357号に断続的に4回掲載された。
- 56) しづ子「小言のいひ様」(『女学雑誌』347号明治26年)
- 57) 巖本善治「撫象座談」(『明日香』古今書院, 昭和11年) 前掲22) pp.183.より転載。
- 58) しづ子「主婦の精神疲労」(『女学雑誌』355号明治26年)
- 59) 「着物の成る木」(1巻18号), 「猫徳」(1巻19号), 「玉とお染めさん」(1巻20-21号), 「三つ宛」(1巻22号), 「おもひで」(2巻1号及び3号)を『少年世界』に「女房演説」を『太陽』(2巻1号明治29年)に発表している。
- 60) 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師—来日の背景とその影響』(東京大学出版会, 1992) pp.181.